

Book Review



咬合学と歯科臨床

よく噛めて、噛み心地の良い咬合を目指して

中野雅徳・坂東永一 編

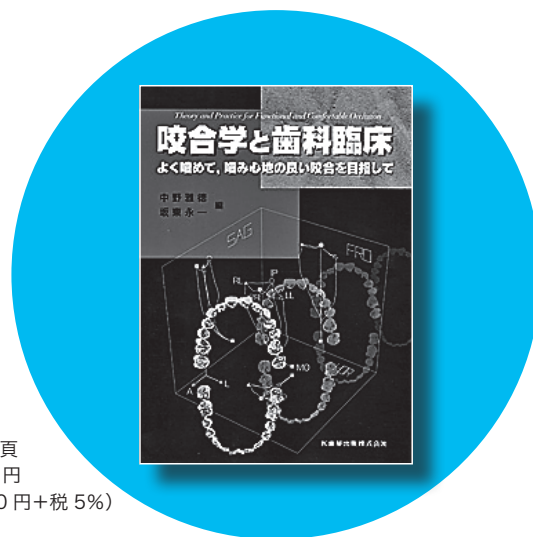


Reviewer

福島俊士

(鶴見大学名誉教授)

A4判, 348頁
定価 16,800円
(本体 16,000円+税 5%)
医歯薬出版刊



日々の臨床において、咬合紙を手に患者さんの咬合をチェックしない日はおそらく1日たりともないであろう。

“Dentistry is Occlusion” とはよく言ったものである。ましてクラウンを新たに装着するとなれば、少なくとも数枚の咬合紙を、それも赤青2種類は使って、新参のクラウンを生体が長い時間をかけて精細に調整した歯列に、それまでの機能を損なうことなく紛れこませなければならぬため、それなりの時間をかけることだろう。

このように、咬合の重要性は十分に承知してはいるものの、いま現在、クラウンのどの咬頭を対合歯のどこにどのように接触させるか（咬合小面の部位、接触面積、接触の強さなど）について、つまりクラウンの咬合面の設計については、コントロールできる状態にない。この基本的な作業がまだわれわれ歯科医の手中にない。

著者らは、それができるようになる

ことを望み、それができるようになった状態を、書名の副題として「よく噛めて、噛み心地の良い咬合」と表現している。これを抽象的と感じる向きには、わかりやすく「望ましい咬合面形態」と言い換えてもいいだろう。

一見、簡単なことのようにだが、実は非常に困難なこの課題を真正面に据えて、鋭意取り組んできた徳島大学における著者らの約30年の研鑽の記録がここにある。内容は、咬合に関する従来の知見の確認から筆を起しているもので、初学者にも容易に読み進むことができる。しかし、やがてこれまで経験したことのない咬合の深みにいる自分に気づくであろう。小人になって、上顎第一大臼歯咬合面の圧搾空間において、口蓋側咬頭の遠心内斜面（著者らのいうBD咬合小面）が迫ってきて食物と一緒に粉碎される恐怖を感じるかもしれない。

本書には下顎運動路をはじめとして

鮮明な図が多用されており、それらの多くに臨床例が添えられ、臨床症状や現症などが記載されているのも特徴である。なかでも下顎運動や歯の運動については、必要に応じて咬合力や筋電図も付され、著者らならではの詳細を極めており、興味が尽きない。近接域も含めた咬頭嵌合位と側方滑走運動時の咬合接触像や、軽度・強度噛みしめ時の咬合接触部位の変化などの可視化の具体例はもっと拡大して見たいほどである。これら著者らの咬合に対する取り組みは、世界的にみても他に追従を許さない先鋭的なものである。

本書を繙くとき、内容の多彩さと精緻さに圧倒される思いがする。また、咬合がここまでできたのかという感慨にも浸ることができる。これらのデータが現在のCAD/CAM技術に組み込まれてこそ、真の補綴装置製作の自動化であり、新しい咬合学に根ざした歯科臨床の到来といえるであろう。